一般教育総合コース

ものをみる眼

1967年度

お茶の水女子大学
平成
28.3.10
受贈
附属図書館

お茶の水女子大学

目　　次

総合コースのめざすもの	井上　茂	11頁
「ものをみる眼」序説	波多野完治	5頁
第一　生命観と人間のいのち	大槻虎男	6頁
第二　作家の「ものをみる眼」と作家をみる読者の眼	酒本雅之	7頁
第三　哲学からみたものをみる眼	藤田健治	9頁
第四　人類学におけるものをみる眼	田辺義一	11頁
第五　有限と無限	亀谷俊司	12頁
第六　自然の見かた．人間（社会－文化）の見かた ―テイヤールニドニシャルダンとシモーヌ．ヴェイユを中心に―	周郷博	13頁
第七　化学の眼	林太郎	14頁
第八　政治をみる眼	蠟山政道	15頁
第九　日本人の目	堤精二	16頁
第十　現代社会と人間	河野重男	17頁
第十一　歴史学とは何か	青木和夫	18頁
第十二　生化学研究における〝ものをみる眼〟	福場博保	20頁
講義日程		

総合コースのめざすもの

一般教育と専門課程との関係がどう結びつけられるのか、これは学生にとっても教師にとっても最も関心のある問題の一つである。しかし、その前に、とくに大学側には、高校生活を終えたばかりの学生を、大学としてどう迎えいれるかという問題がある。学生側についていえば、大学での学問と生活とにどうとけこんでいくかという問題である。

われわれの大学では、一般教育担当と専門課程担当との教授を区別していない。これは大きい利点をもつとともに、欠点も生まれてくる。専門の研究に没頭している教授に対しては,教養課程の学生はとかく近よりがたいし、その講義の仕方や用語にもなじみにくい。教授の側にも教養課程の学生はあつかいにくい。このような事情の中で行われる一般教育であるから、学生と教授との間にちぐはぐなことがおこりがちである。講義が、ばかにやさしかったり、おそろしくむづかしかったりすることにもなる。

このような欠点については、個々の教授による具体的な局面の打開がすでに行われているであろう。しかし、一般的な問題としても、学生と教授との双方で、ある種の自覚が基本的態度として必要であろう。高校の成績がよいとか、強度の受験勉強をしてきた学生にとくに見受けられる欠陥がある。われわれはこれをまず意識的にとりあげなければならない。それは、「結論」を重視し、それで足れりとして、そこまでの「過程」や「手続き」を軽視したり看過している態度である。これは、現在の学生が育成されてきた○×教育のためであるという見方もできよう。しかし、学生じたいは、このことに気づいていないのが普通である。理由はなにであれ、このことを認識して、結論を箇条書式に覚えるような勉強を強いられてきた頭をまず打ち割り、過程

特別講義の開設について

本年度から総合コースに「特別講義」を設けます
その年度のテーマに関する広い視野と深い体験に
もとずく現実的な内容の講義が行われます
講師は毎年，いずれかの分野の最高に適任な方
を，広く学外から招くことにします

今年度は，婦人少年の労働・社会問題について
第一線の仕事を重ねてこられた谷野せつ氏にお願
いしました

谷野せつ氏略歴

昭和２２～３０年　労働省婦人少年課長
昭和３０～４０年　労働省婦人少年局長
現在　労働保険審査会委員

や手続きを重視して理解する思考力を育成するように、学生じたいが積極的な態度をとる必要がある。

そのような態勢をとるための足がかりとして、総合コースは適切な場の一つとなるであろう。これは、学生の積極的な講義への参加という形で、他の一般教育課目とはちがった役割を果しているはずである。われわれの大学では１０年以上総合コースを続けているが、１０年の歩みは、学生の講義に対する姿勢を受動的なものから能動的なものに前進させることを最も重視する方向をとってきた。

本学の総合コースの講義要項をみて、初年度のそれは総合性、連続性のあるものであったが、最近のは並列的で体系的でないという批判があるかもしれない。しかし、これは、われわれの総合コースの根本的な趣旨を誤解していることになる。本学の総合コースは初年度いらい同じ人びとによって実施計画をすすめてきている。そして、初年度のそれと近年のそれとの間にには、経験と再検討との１０年の歩みがある。総合コースは、教授側でととのえた「おしきせ」を学生にすっぽり着せるものであってはならない。そこでの「総合」は、はじめから「総合されたもの」を与えることではない。それは学生の「総合する力」を育成することにある。もちろん、講義全体としては、ある程度の統一性ないし体系性をそなえていなければならない。しかし、共通のテーマを基軸として、ことがらを統一的体系的に理解する力を学生じたいがもつように、そのための素材と刺激とを与えることが総合コースの役割である。これが、１０年余の実行と経験とによる総合コースの課題として、現在われわれが到達している段階である。

講義への学生の参加ということは、学生が実際に発言や動作で参加するのではなくても、教授側にこのことを意識した姿勢があればよいのである。

これは、講義に対する学生の関係を、受動的でなく能動的なものとして考える姿勢である。「総合」は具体的なものとして、まさに学生にこそ課せられる仕事であり、学生も教授もこれを中心課題として総合コースに共に参加するのである。

われわれの総合コースは、大学で研究され教育されている諸種の学問を「理解」するための準備段階として、一般教育において特異な位置をしめるものである。学問への「理解」は、なによりも、学問えの関心ないし気持をもつことにはじまる。この「学問への初動」を与えるものとして、総合コースの意義はある。そして、学問への初動をうける段階に立っている学生に、まとまった知識体系を提供することは、少くとも、われわれの総合コースの第一義的な使命ではない。

大学生活において、諸君は自らの思考力．判断力．理解力を自身で育成することにまず努める必要がある。他人が考えたことに○×式に賛否を表明しているだけでは、諸君の大学生活は無意味である。市民生活につながる大学生活での諸君の思考と行動との能動性は、まず、学問の府である大学において、学問にこそむけられねばならない。そして、その具体的な第一歩の一つが、総合コースにおける諸君の能動的な姿勢である。

井　上　茂

○ 「ものをみる眼」序説

波 多 野 完 治

第一部

(A) 総合コースの教育史的背景

(1) アメリカの場合

(2) わが国の場合

(B) 本学の総合コースの特長

(C) 本年度の試み

(D) 総合コースを聴講する態度

第二部

「ものをみる眼」の心理学

(1) いろいろな見方 —— その多様性

(2) 科学的見方と常識的見方

(3) 科学分類への試み

(4) 仮説検証法

〔参 考 書〕

田 辺 元 「科学概論」

戸 坂 潤 「科学方法論」

久 野 ・ 鶴 見 「現代日本の思想」

大 塚 久 雄 「社会科学の方法」

エドワード・ホール 「沈黙のことば」

○第一　生命観と人間のいのち

大　槻　虎　男

一般の生物体の生命について、自然科学的生命観を学び、人間が生きているのはただの偶然か、何か意味があるのかの問題にアプローチする目を養いたい。

1. エジプト時代
   旧約時代
   ギリシア―― ローマ時代
2. 生気説と機械説
   生物機械論の発展
   生命の起源
   微生物特にビールス
   タン白質の人工合成
3. 人間のいのち

〔参　考　書〕

八　杉　竜　一	生命とは何か	河　出　書　房
オパーリン著 江　上　訳	生命の起原と生化学	岩　波　新　書
ウイーナー著 池　原　訳	人間機械論	みすず書房
バ　ト　ラ　著 柴　谷　等　訳	生命の内幕	みすず書房
川　喜　多　愛　郎	生物と無生物の間	岩　波　新　書
シユレーデインガー著 岡小天学訳	生命とは何か	岩　波　新　書

○第二　作家の「ものをみる眼」と作家をみる読者の眼

酒　本　雅　之

一般的に言えば、作家にとって現実世界は素材である。たとえば科学者にとっては、まさにその現実世界こそが真理の存在している場所であり、真理を探求していくための領域であるのに対して、作家は、現実世界のさまざまな事件や経験を素材として、おのれ自身の真理を創造していく。つまり科学者にとっては、真理はすでにそこに存在しているのであり、その所在を突きとめることが彼の研究行動なのであるが、作家にとっては、真理は何よりも先ずこれから創り出されるべきものであり、他ならぬ彼自身がその創造の主体なのである。だから、言ってみれば作家は、おのれの手になる文学世界に関するかぎりは、創造主、つまり神だと言えなくもない。

作家が現実世界を「見る眼」とは、したがって、それをどのような種類の素材として見るかということに他ならないが、さらにそのことは、作家がどのような種類の秩序創造を目ざしているかということに密接にかかわっている。しかし、作家の創造行為が辿るべき方向は、当然のことながら彼自身の恣意（しい）によって決るものではなく、そこには歴史的、地理的、心理的、文化的など、さまざまな要因が複雑に働いている。したがって、これらの諸要因を解きほぐしていくことが、作家の創造の秘密に参入するための条件であり、文学研究にもさまざまな方法が必要とされる所以（ゆえん）であるが、しかし読者にとって何よりも大切なことは、つねに作品を、作家が現実世界とのあいだの劇的な緊張に耐え、それをおのれの秩序のための素材として組み伏せようとした創造行為の所産として ― つまり、つねに異質な現実世界

との、決定的な断絶をふくんだ関係において作品を「見る眼」を持ちつづけるということだろう。現実世界は素材にすぎないものであると同時に、それがまさに素材であるからには、けっして軽視すべきではない決定的な要因でもある。現実世界が作品に対して持つこのような二面性、つまり、同じことであるが、現実世界が作品へと昇華していく過程を、諸者であろうとするためには、絶えず凝視しつづけていなければならないのである。

〔参　考　書〕

戸　坂　　潤	『科学論』（戸坂潤全集、勁草書房）
武　田　泰　淳	『司馬遷 —— 史記の世界』（講談社）
ホイットマン	『草の葉』（長沼重隆訳、角川文庫）
花　田　清　輝	『復興期の精神』（講談社、または未来社）
メルヴィル	『白鯨』（富田彬訳、角川文庫）
芥川竜之介	『芥川竜之介全集』（普及版．筑摩書房または岩波書店）
トマス・ウルフ	『天使よ故郷を見よ』 上．下（大沢衛訳．新潮文庫）
大沢衛（編）	『トマス．ウルフ』（研究社）
世界名詩集大成	『アメリカ編』（平凡社）
E．フロム	『自由からの逃走』（日高六郎訳．世界思想教養全集『現代アメリカの思想』所収．河出書房）

参　考　資　料：——— 講義当日に配布する。

○第三　哲学からみたものをみる眼

藤　田　健　治

1. 対象の見方把え方 —— 要素と類型 —— 分析と総合
   既知体験の基盤と未知発見の活動
2. 直観と思考
   a　経験直観と本質直観（情感的直観．価値直観）
   b　意味指向（概念）と意味充実（直観．記憶．想像）
3. 認識の種類
   a　実在的（感性的）認識と観念的（非感性的）認識
   b　推理的認識
   c　表現理解
4. 知識の被規定性
   a　生理的心理的（コムプレックス）——— 個人的性格
   b　歴史的社会的（イデオロギー）——— 民族的時代的性格
5. 人間観．世界観の類型
   a　人間観 —— 生命・精神・実存
   b　世界観 —— 自然主義的・歴史主義的

〔参考書〕

Edmund Husserl Ideen zu einer reinen Phänomologie und Phänomenologischen Philosophie（純粋現象学考案　池上鎌造訳　岩波文庫）

Wilhelm Dilthey, Der Aufbau der geschicht lichen welt in der Geisteswissenschaften（精神科学における歴史的世界の構造）

Nicolai Hartmann, Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis ;（認識の形而上学綱要）　Zur grund legung der Ontologie　（存在論の基礎論）

Eduard Spranger, Lebensformen　（生の形式）

Max Scheler, Die Wissensformen und die Gesellschaft（知認の形式と社会）　藤田健治　歴史的世界と人間存在　理想社刊

○第四　人類学におけるものをみる眼

田　辺　義　一

動物が環境にむすびつけられているのに対し、人は世界にひらかれている（ポルトマン）といわれるように、人は事象に対する仕方——ものをみる眼——において他の動物ときわ立ったちがいがある。この所以を主として人の進化の見地からみてゆく。

1. ものをみる人
2. 進化の考え方
3. 過去の人とその生活の復元
4. 人の進化をどうみるか。

〔参考書〕

ポルトマン：人間はどこまで動物か．　岩波新書

チャイルド：文明の起源．上，下　　岩波新書

ベネディクト：菊と刀．　現代教養文庫

○第五　有限と無限

亀　谷　俊　司

数学では‘無限，をどうみ、どうとりあつかうかについて解説する。

1. 数学的言語，集合の考え，論理との関係
2. 単射と全射
3. 濃度，その比較
4. 有限の濃度と無限の濃度，自然数の集合
5. いくらでも大きい濃度があること

〔参考書〕

ポアンカレ　（吉田洋一訳）：科学と方法

数学事典　（岩波書店）

亀谷俊司：集合と位相　（朝倉書店）

○第六　自然の見かた・人間（社会−文化）の見かた

−ティヤール＝ド＝シャルダンとシモーヌ．ヴェイユを中心に−

周　郷　博

いまは「自然人類学」という名称で呼ばれるティヤール＝ド＝シャルダンの自然（地球の物質と生命）と宇宙と人間のつながりと運動（進化）——その時空のひろがりのなかで人間を考えてみる。

主著〃 Phénomène Humain. 1955,〃の理解が中核になる。

そこへ〃 Avenir de l' Homme〃 その他と、ティヤールとの関係が深いように思われる。Simone Weil の〃Attente de Dieu〃...〃Ecrits de Londre〃 など、第二次大戦前後における〃ものをみる眼〃人間観、自然観、社会観の想像を絶する拡大発展の典型をこの二人の Unusual な人物の行動と思索のなかに見ようと思う。それが日本人の「もの」「こ（ご）と」の世界観、人間観をどう発展させるか？教育とどうかかわるか？

〔参考書〕

P.Teilhard de chardin	〃 Phénomene Human〃
〃	〃 Avenir de l' Homme〃 その他
Simone Weil	〃 Attente de Dieu〃
〃	〃 Envacinement〃
〃	〃 Ecrits de Lovdres〃
Iean Charon	〃 Du Temps de l' Espace et des Hommes〃
今　西　錦　司	「私の自然観」
江　上　不二夫	「生命を探る」

その他

○第七　化学の眼

林　太　郎

化学者が自然を見るときにその成分に注目し、それから元素の概念がひき出され、さらに原子、分子の概念にまで発展し、これが他の自然科学分野にまで拡大し、今日の自然科学にまで発展したのである。

化学の中でも有機化学はその対象とする物質の構成元素が僅か四，五種であることから、分子の構造を考えるようになり、遂にその三次元構造にまで発展したのである。

その間におけるPasteur, Emil Fischerらの研究の経過は化学者の物質に対する態度をよく示すものである。

以上のことがらを中心として化学の眼ともいうべき点につき現在の科学の立場から述べる予定である。

〔参考書〕

Fieser and Fieser : Introduction to organic chemistry （丸善）

埼川範行　：地球は生きている（講談社現代新書）

井本　稔　：ナイロンの発見（高分子化学刊行会）

ハイトラー（岡，三木訳）：科学と人間（みすず書房）

○第八　政治をみる眼

（昨年と同じものをあげたが、変更があるかもしれない）

蠟山政道

1. 予言と占い
2. イデオロギーとビジョン
3. 科学的知識と総合的判断

〔参考書〕

Lindsay Rogers, Political Crystal Gazing, 1955

Graham Wallas, Social Judgement, 1934

蠟山政道、新日本のビジョン、１９６５

○第九　日本人の目

－日本文学作品を通して－

堤　精　二

日本人が、どのような〃ものの見方〃をして来たか？現在のわれわれの〃ものの見方〃の基盤となっているものを、文学作品の中に求めて検討してみたい。

〔参考書〕

津田左右吉「文学に現われたる　我が国民思想の研究」

阿部次郎「徳川時代の芸術と社会」

会田雄次「ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界」

○　第十　現代社会と人間

河野重男

現代社会をとらえる場合の分析視角には、さまざまなものが考えられる。ここでは、とくに＜組織のなかの人間＞，そして＜大衆社会状況下の人間＞という角度から、現代社会の特質とそこにおける人間の問題について考察する。

〔参考書〕

W．H．ホワイト
岡部．藤永　訳　＞　組織のなかの人間　上．下　創元社

リースマン
佐々木　訳　＞　孤独なる群衆　みすず書房

西村勝彦　現代の人間と社会　誠信書房

○第十一　歴史学とは何か

青木和夫

大学に一般教育課程なるものが必要であるとしたばあい、その課目の中に果して歴史学を加える必要があるのか。あるとすればそれはどのような内容でなくてはならぬか。考えれば気の重いことである。私の分担分の内容については予告できなくて申しわけない。（１９６７年４月１日現在）

ただ次のような著書．論文は、読むべき時機のすぎぬうちに読んでおかれたほうがよいと思う。

参考文献

三木清「歴史哲学」（この書物に引用されているほど数多くの古典を学生時代に読破することは難しい。という理由でお勧めしたい。）

マックス．ウェーバー「職業としての学問」（訳本は岩波文庫。講演だから読みやすい。ついでに同じ著者の「職業としての政治」「社会科学方法論」もお勧めできる。みな、星一つ。歴史学の実務家には、どうもマルクスの方法よりもウェーバーの方法のほうが役に立っているようである。）

同「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（岩波文庫で２冊。ウェーバーがその方法を実践した論文。註は特にむずかしいけれども、分らなくて大丈夫。ほんとうにすぐれた研究者の、ほんとうにすぐれた論文は、たとえ専門家でなければ分らないところがあるにしても、すべての人になにがしかの感銘を与えるからふしぎである。読む時機によっては、読んだ人の生涯の方法さえ左右する。）

石井進「鎌倉幕府と律令制度地方行政機関との関係」（史学雑誌の６６篇１１号に掲載。現代の若い研究者の秀作の一例。一般に歴史を勉強するには

通俗的ベストセラーを何冊も読むより、教師の推賞する論文一篇を読んだほうがいい。）

○第十二　生化学研究における
″ものをみる眼″

福　場　博　保

１９３０年以降における生化学の発達はめざましいものがあり、多くのノーベル賞受賞者がこの分野から出ているが、これら生化学研究の新らしい方法について考えると共に、どのようにして、新らしい代謝様式が考究されたかをふりかえり生化学の″ものをみる眼″を考えてみたい。

また、栄養素に関する考え方の変遷から同様、栄養生化学者の″ものをみる眼″を考え、今後の発展を予測したい。

回想・総合コース

内海誓一郎

わたくしは１９５７年（昭和３２年）４月に本学理学部教授として着任し、今年、すなわち１９６７年（昭和４２年）３月定年退職した。この機会になにか回想でも書くようにと求められたので、まとまりがないが想いつくままを述べさせて頂いた。

着任したとき、すでに当時の蠟山学長が大きな抱負をもって始められた本学独特の総合コースの第２回が行なわれていた。もとよりわたくしはそのようなことに何の予備知識もなく、またはじめは関係もしなかったのであるが、そのうちに教授会の依嘱で一般教育の委員に加わることになり、特にのちには総合コースの自然科学系の講義のお世話をするようになり、１９６４年（昭和３９年）民主教育協会で「一般教育における総合コース」という教育資料を刊行されたとき（ＩＤＥ教育資料第３２集）には、主としてその編集に当られた関野豊三教授らとともにお茶の水女子大学総合コース研究会の一員として末席にその名を連ねた。

一般教養による人間形成という新制大学以来の高い理念を達成するためにこの総合コースという企画がよい方法であるか否かについては未だに十分な確信がないというのが正直なところであるが、もとよりこれが成功するためには関係者の十分な賛同と協力が得られなければならない。実はこれが困難の第一の点であって、陣頭に立ってもっとも熱心に企画を推進しておられた蠟山先生が学長を退かれた１９５９年には、先生自身もこれで潰れてしまうのではないかと思われたほどであった。

しかしその後潰れもせずに今日まで続き、のみならずむしろ企画に積極的

に参加される先生方が殖えてくる傾向にあるのは、皮肉にもお茶の水女子大学の総合コースが全国の大学の間に有名になり、これを真似て新しい企画をはじめるところがいくつか現れ、このことが逆に本学教官自身に多くの関心をよび起こしてきたためのようにも思われる。

すべての職業や研究が細分化、分業化し、能率を上げることを専一にしなければたちまち人に遅れてしまうという専門の先生の気持はよくわかり、自分の仕事に専念しておられる先生方が総合コースへの協力を辞退されるのも無理からぬことに思われ、特にその傾向は自然化学系に強く、世話役は苦労したことであった。またはじめの頃、人文．社会系の先生方がコースのテーマとして選ばれる標題が、「ギリシア．ローマ文明」とか、「自由と進歩」とか、「東と西」とかいう表現であっては、それと数学、物理、化学、生物学などと、自分の考えで連絡をつけようとすることに躊躇される先生が多かったとしてもふしぎではない。昨年と今年のテーマ「ものをみる眼」などはこの点を考慮した井上教授の苦心の選定なのである。

一般教養の理念である「専門の研究者である前に、まず一人の人間であれ」、という考え方が正しいのか、まちがっているのか、実はわたくしにはよくわからないのである。偉大といわれるほどの研究者が、自分の仕事にだけ専念し、ほかのことに費した時間はそれだけの罰となって自分の身に戻ってくるというきびしい求道者の態度もりっぱだと思う。わたくしなどまことに恥かしいといくたびか思ったことであったが、また人がひたすらに自已に課した限定の枠が、思いがけぬ内的な衝動によって脆く崩れることがあるのではないかとも思ったりする。

学生諸君に親しく接してみると、なによりもまだまだ専門というものに対する覚悟も素養もできていないと思わざるを得ない。これをはがゆいとみる

先生方が、学生に混屯とした情意を抑制してまっしぐらに専門へ進むことを求めるのがよいか、もっとあせらずに広い基盤をがっちりと築いて行くのがよいかが意見の相違のもととなる。もっとも総合コースがそれほどのりっぱな教育成果を挙げ得る自信があるか否かに話が戻ってくるわけであるが……。

講　義　日　程

（講義日時＝土曜日第三．四時限10.20～12.00）

月	日	系列	担当講師	月	日	系列	担当講師
4	15		波多野（序説）	11	4	自然	林
	22	自然	大　槻		11	特別講義	（谷野せつ）
5	6	〃	〃		18	社会	蟻　山
	13	人文	酒　本		25	〃	〃
	20	〃	〃	12	2	人文	堤
	27	人文	藤　田		9	〃	〃
6	3	〃	〃		16	社会	河　野
	10	自然	田　辺		23	〃	〃
	17	〃	〃	1	13	社会	青　木
	24	自然	亀　谷		20	〃	〃
7	1	〃	〃		27	自然	福　場
9	16	人文	周　郷	2	3	〃	〃
	23	〃	〃		10		セミナー
	30		セミナー		17		セミナー
10	28	自然	林		24		試　験